



# アスンシオン通信

日付: 2025 年 3月21日 no.25

発行者: 田邊紘起

¡Hola !¿ Como están?

田幸小学校の皆さん、最後までよくがんばりましたね。今年度はどんな一年間でしたか？ 楽しいことばかりではなく、時には大変なこともあったのではないのでしょうか。田幸小学校には、どんな時でも気持ちを伝え合うことができる仲間がいます。時にはぶつかることがあっても、みんな支え合いながら、協力して次の学年も盛り上げていきましょう。

私はこの一年の変化がとても大きく、驚きや感動の連続でした。ここまでの生活を振り返って、今の気持ちをまとめたいと思います。

## パラグアイに住んでみて…

最初の印象は「道路がこわい!」でした。到着したその日からしばらく雨が降り続き、道路の水はけが悪いことに驚きました。雨が降るたびに大量の雨水が道路にたまり、川のようになります。大きな穴ぼこもたくさんあって、埋める工事はしているようですが、雨が降るとすぐに土が流れてまた新しい穴ができてしまいます。しかも、その穴がどろ水に隠れて見えません。「パラグアイの人は雨が降ったら学校を休む」と聞いて、「雨だけで?」と思っていましたが、雨が降った時の運転はかなり危険で、「これでは家から出れない!」とあきらめるのも納得しました。日本の道路なら普通にある側溝がどこにもないので、雨水がたまってしまうのだと思います。日本だったら、どんなに細い道でも側溝があります。これも雨が深い日本で発達した技術なんだなと思いました。

信号機がある交差点では、一時停止する車に向かって物売りや募金を募る消防士、物乞いをする子供などがたくさん近寄ってきます。先生も、初めの頃は「なんだろう。」と戸惑いました。日本でも車の運転はしていましたが、日本とは道路事情が全く違うので、恐る恐る運転しながら

子供たちを保育園まで送っていました。このスリル満点の道路の運転に慣れることは、おそらくこれからもないでしょう。



側溝がない道路や歩道の様子=アスンシオン

## さて、どうしたものか…新生活。

パラグアイに来たばかりで、まだ何も分からなかった頃、同じ経験をしてきた日本人学校の先生方に、パラグアイの食べ物やよく利用するオススメのお店などをたびたび教えてもらいました。そうしているうちに、少しずつアスンシオンのことが分かり始めました。また、困っていると必ず親身になって手を差し伸べてくれるパラグアイの人々に何度も助けられました。

## 【ほっこりエピソードその1】

～スーパーマンのようにかけつけてくれた～

子供の迎えに行った時、雨のせいで車の調子が悪くなって困っていると、保護者の知り合いが「どうしたの?」と助けに来てくれました。事情を話すと、「家はどこ?」と片道1時間もかかる道のりを、笑顔で家まで送ってくれたのです。その人の家は学校から歩いて5分もかからない場所なのに。こちらがお礼を言うと、「あなた達の役に立てて嬉しいです」という言葉が返ってきました。ここから自分の家に帰るのに、また1時間近くかかります。とてもありがたかったです。

## 【ほっこりエピソードその2】

～あっという間に座れた!～

フードコート(ショッピングモールの中にあるご飯を食べる場所)で席を探していたら、あっちからもこっちからも「ここにイスがあるよ!」「あのテーブル空いたよ!」と声をかけてくれて、あっという間に座ることができました。その場はたくさんの「gracias(ありがとう)」にあふれ、みんな笑顔で素敵でした。

## 【ほっこいエピソードその3】

～一度あいさつしただけでアサードパーティーにご招待!～

学校がお休みの日に子供たちをマンションの屋上で遊ばせていたら、「日本人?」と声をかけてくれたお兄さん。「今度うちで一緒に遊ぼう。」と誘われ、その後本当にアサードパーティー(バーベキュー)に招待されました。言葉はほとんど通じなかったけれど、「まずは僕たちの会話を聞くことが勉強になるからね。」と仲間の輪に入れて歓迎してくれました。おかげで本場のアサードを食べながら、1日のんびり過ごすパラグアイの生活習慣を味わうことができました。見ず知らずの外国人をこんなに気軽に家に招いてくれるパラグアイの人々の明るさと心の温かさに驚きの連続です。やっぱり人は一人では生きていけません。人の優しさのありがたみがよくわかりました。



店員さんと帽子を交換してパシャリ=la Cabrera

## とても温かい国なんです！

大きなポットとテレレセットをもって日陰に座ったり寝ころんだりしながらのんびりしているところが、パラグアイの人たちのよいところです。危険な所もあるし、事件や事故のニュースもけっこう多いです(人が亡くなる事件が日本の10倍くらい多く発生しているそうです)。しかし、「南米は危ないところだ。」と一言で片付けてはいけません。お互いに支え合いな

がら生きることは、人が大切にしないといけないことだと思います。いろいろなことが「便利」で「速く」で「楽」になるよう自動化されていきますが、不便を知っているからこそ、人のありがたみや温かさが分かります。最初は「ここで2年間生きていけるのかな。」と思っていました。でも、1年間パラグアイで生活して、たくさんの魅力を見つけました。残りの1年も、家族と支え合いながら、アスンシオンを中心にこちらの文化にどっぷりハマりたいと思います。これまで、アスンシオン通信を読んでもくださった皆さん、ありがとうございました。これからの通信もお楽しみに！

Chao chao!nos vemos!